

<p>総 説</p>

I. Walaszczyk ならびに共著者による白亜紀イノケラミ科に関する論文数編の紹介と論評

松本達郎*・西田民雄**

ワルシャワ大学の I. Walaszczyk は、かねてから白亜系産イノケラミ科の分類と生層序の研究を進めているが、最近西欧・北米の学者の協力を得て、国際的に重要な成果を次々と発表している。論文名は長くなるので省き、年号・誌名等を挙げて内容の大意を紹介する。先ず、1992年 *Acta Geologica Polonica*, 42, p.1-122に単著でポーランド (Central Polish Uplands) のチュロニアン～サントニアンイノケラミ科諸種の層序・古生物学研究成果を発表した。続いてチュロニアン・コニアシアン境界問題に関連して、英国の C. J. Wood と共著で1998年同誌48, p.394-434, pls. 1-19に、ドイツの Lower Saxony の Salzgitter-Salder 石切り場 (T・C境界の基準地候補) におけるイノケラミ科諸種の生層序を示し、改定された分類を示している。それによると、*Cremnoceramus walterdorfensis walterdorfensis* (Andert) は、チュロニアン末期に出現し、コニアシアン最下部にわたるが、これより派生したとみなされる *C. deformis erectus* (Meek) が下部コニアシアンを4分した最下部の示帯化石種とされている；等々従来の提案を大きく改訂している。日本における分類と階境界についても再検討が必要だが、上記論文では伴う頭足類や微化石の産出記録が添えられていない。

1998年同誌48, p.495-507には、W. A. Cobban との共著で米国の Western Interior におけるチュロニアン・コニアシアン階境界に関して、コロラド州の Pueblo section とニューメキシコ州の Wagon Mound and Springer sections

との層序柱状図を掲げ、これにイノケラミ科諸種のレンジが示されている。また、Pueblo と上述のドイツの Salzgitter-Salder の柱状図を添え、欧米の国際対比を明示している。

続いて Walaszczyk, I. & Cobban, W. A. の共著が、2000年12月に *Special Paper in Palaeontology*, 64, 118p. (32pls., 27 text-figs. を含む) として出版され、米国の Western Interior における上部チュロニアン～下部コニアシアンのイノケラミ科フォーナと生層序が詳述されている。同地域のアンモノイドの分類と層序的産出については、多年にわたる Cobban の業績があることは周知のとおりである。そのまともは例えば1993年 *Geol. Assoc. Canada, Special Paper*, 39, p.435-451などにある。

さらに2000年出版の *Acta Geologica Polonica*, 50, p.295-334, pl.1-15には、Kennedy, W. J., Walaszczyk, I. & Cobban, W. A. の共著で、米国コロラド州 Pueblo (グローバル基準候補地) におけるチュロニアン階基底 (セノマニアン階との境) 並びにチュロニアンの中部・上部亜階の規定に関する論文がある。アンモノイドは別な論文 (Kennedy *et al.*, 1999: *Cretaceous Research*, 20, p.629-639) があるので3図版を示す程度であるが、イノケラミ科については、従来の知見の修正を含めて、詳しく記述され、多数の保存の良い標本が図示されており、きわめて重要な文献である。特に *Mytiloides* の諸種の正しい分類と生層序の産出が明示されている。

これと照合して、松本・西田 (1995) が化石, 59, p.47-66に示した日本における同属諸種の層序的産出を省みると、大綱として米国のと調和している。但し *M. columbianus* (Heinz) は *M.*

* Tatsuro Matsumoto 福岡市南区南大橋1-28-5

**Tamio Nishida 佐賀大学文化教育学部

2001年5月24日受付, 2001年5月28日受理

kossmati (Heinz) の後進シノニムなので、種名を後者に改めるべきである。また本来の *M. labiatus* (Schlotheim) は、従来多くの文献で理解されていたものとは異なり、それは日本からは未報告である。松本・西田、1995での同種名の標本をどう修正すべきか、上記論文には言及が無い。また日本の下部チュロニアンに多産する *Inoceramus kamuy* Matsumoto & Asai は欧米での産出報告がまだ無い。

ここに紹介した諸論文は最近の白亜系各階ならびに亜階の境界の定義を確定しようとする国際的課題とも密接にかかわっており、正確で厳密にという意図をもって、多年の経験を持つ第一線級の研究者の国際的協力によりもたらされた成果の例とすることができる。今回はイノケラミ科を紹介・論評の主対象としたが、他の部類あるいは他の方法についても同様な努力が重ねられている状態である。